メシア初臨預言の学び　ゼカリヤ書とマラキ書から

はじめに

1. 預言者ゼカリヤ
   (1) バビロン捕囚から帰還した時期の預言者
   (2) レビ族の祭司
2. 時代背景：「約束の地」の支配者
   (1) ダニエル書の預言「4つの世界帝国」
      ➢ バビロニヤ→ペルシヤ→ギリシヤ→第四の国
   (2) ゼカリヤの時代には、バビロニヤ帝国から、ペルシヤ帝国に移っている
   (3) 次は、ギリシヤ帝国、そして第四の帝国（ローマ帝国とそれ以降の国際社会）へ
3. ゼカリヤ9：1～10　初臨のメシアは、ろばの子に乗って来る
   (1) 1～8節は、外国の王によるツロやガザへの侵攻の預言。しかし、エルサレムは攻撃を受けないという預言。
   (2) この王は、ギリシヤのアレキサンドロス。ゼカリヤから約200年後、紀元前330年頃のアレキサンドロスの東征によって、預言は成就された。
   (3) アレキサンドロスが白馬に乗って来たのとは対照的に、9節で、メシアはろばの子に乗って来る。紀元30年春、イエスのエルサレム入城において成就。

前回までの最近の学び　ゼカリヤ11：1～17　二人の羊飼い

1. メシア初臨とそれに伴って起きる出来事に関する預言
2. ローマ帝国の時代に成就
3. 3つの区分
   (1) 1～3節　国土の荒廃に関する預言
   (2) 4～14節　真の羊飼いが拒否されることの預言（→紀元70年　エルサレム陥落・神殿崩壊と離散）
   (3) 15～17節　偽の羊飼いが現れることの預言（→紀元135年　バル・コクバの乱と国土の徹底破壊、世界離散）
4. イスカリオテのユダの死とエレミヤの預言（エレ7：31～34、19：1～15）
   (1) ゼカリヤ11：12～13に、メシアが銀貨30枚に値積もりされること、その銀貨は神殿の陶器師に与えられることが預言されている。
   (2) 紀元30年、ニサンの月の15日夜、イスカリオテのユダはイエスを裏切って、銀貨30枚でイエス逮捕の手引きをした。
   (3) 15日夜明けとともにユダヤ議会サンヘドリンにおいて有罪死刑宣告が出る。そのことを知って、ユダは「罪のない人の血を売ってしまった。」と後悔し、自殺。
   (4) その日神殿で過越の犠牲をささげるためには、市内に死体があってはいけない。すぐにユダの遺体は城壁から谷へ投げ落とされ、後で回収、埋葬された。

(5) ユダは自殺する直前、いったん受け取っていた銀貨30枚を、神殿の中に投げ返した。これは神殿の金庫には戻されずに、陶器師の畑が買われ、旅人のための墓所となった。

(6) そこは、「血の畑」、「血の地所」と呼ばれるようになった。伝承によると、ユダが最初にそこに埋葬された。

(7) 紀元70年、その場所一帯が、ローマ軍によって殺された110万人のユダヤ人たちの遺体埋葬場所となる。埋葬する余地がなくなったほど。

(8) エレミヤはそのことを、「ヒノムの谷は虐殺の谷と呼ばれる」と預言していた。

ゼカリヤ12：10の預言　メシアの最終的受容

1. ゼカリヤ12章の内容
   (1) 12章は、メシアの再臨、とくにハルマゲドンの戦いについての預言
   (2) その中で、10節はメシアの初臨に関係する内容を含む
   (3) メシア再臨の前提条件は、二つ。
      ① ユダヤ人指導者層がメシア初臨のときの拒否を悔い改め、すべてのユダヤ人に呼びかけて、イエスこそメシアであったこと、これまでのイスラエルの歴史は神に反抗し続けてきたことを認め、民族的に悔い改めること。
      ② メシアが帰って来てくださるように、神に祈り求めること。
   (4) 10節は、その悔い改めの時の様子を記述している。ひと言でいうと、「嘆く」。
2. ゼカリヤ12：10から3つのポイント
   (1) 初臨のメシアは、ユダヤ人指導者層から拒否を受けるであろう。
   (2) イザヤの預言では、メシアは死ぬことが明らかにされた。さらに、このゼカリヤの預言で、そのメシアの死は、穏やかな死ではなく、暴力的な状況の中での死であることが推測される。「突き刺される」
   (3) ここで語っておられるのは、「主」である。「彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見」とあるので、突き刺されるお方は、主ご自身である。よって、メシアは、神ご自身である。
3. 初臨におけるこの預言の成就・・・「突き刺す」→ヨハネ 19：31～37、ローマ兵がイエスの脇腹を槍で突き通した。

まとめ・・・ゼカリヤ12：10は次をことを預言している。

☆メシアの初臨は、イスラエルの指導者層によって拒否される。

☆メシアは、暴力的な死を遂げる。槍で突き刺される。

☆メシアは、神であり人である。

ゼカリヤ13：7の預言　良い羊飼い

1. 13：7の「わたしの牧者」は、11：4～14の「良い羊飼い」、メシアである。この箇所は、ゼカリヤ11章の預言全体の総括であると言える。
2. 日本語訳では「わたしの牧者を攻め、わたしの仲間の者を攻めよ」とあるが、原文は「攻めよ。わたしの牧者を、その男を、わたしと等しい者を」となる。
   (1) 「男」であるから、メシアは「人」である。
   (2) 「わたしと等しい者」であるから、メシアは「神」である。
   (3) よって、メシアは、神であり人であるお方である。
3. この箇所も、メシアの死が、暴力的であることを預言している。
4. この箇所は、メシアの死が、イスラエルの離散の原因となることを預言している。
   (1) 良い羊飼い＝メシアは、打たれる＝十字架にかけられる（紀元30年）。
   (2) 羊＝イスラエルは、散らされる＝約束の地から離散する（紀元70年）。
5. マタイ26:31～32においては、この箇所はイエスの弟子たちにあてはめられているが、ゼカリヤ13：7の第一義的適用は、紀元70年の離散である。
   (1) イエスは、弟子たちが散ることをイスラエル離散の予表として見ている。
   (2) マタイは、イスラエルがメシアを拒否したことで神の裁きがエルサレムに下される日が近いこと、その結果としてイスラエルが約束の地から吐き出されることを意識して、マタイの福音書をユダヤ人向けに書いた。
   (3) マタイは、イスカリオテのユダの裏切りも、イスラエル民族が初臨のメシアを拒否するという枠組みの中で見ている。
   (4) マタイは、イスカリオテのユダが銀貨30枚でイエスを売り、そのお金で墓地を買う結果になったことについて、そのこと自体はゼカリヤの預言の中にあるが、全体としてはエレミヤの「ヒノムの谷」の預言の枠の中にあることとして、預言の引用をしている（マタイ27：9～10）。
6. ゼカリヤ13：7、「子どもたち」
   (1) イスラエル、とくに紀元70年にエルサレムに集まる一般市民のこと
   (2) 彼らが苦しみを受けるのは、どうしてか。
      ① イスラエルの指導者たちに追従して、良い羊飼い＝メシアを拒否。
      ② さらに、ペンテコステ以降40年にわたる使徒たちによる証ししるしを見聞きしておきながら、それを拒否し、使徒たちを迫害したから。

まとめ・・・ゼカリヤ13：7は、次のことを預言している。

☆メシアは、神であり人である。

☆メシアの死は、暴力的である。

☆メシアの死は、イスラエルの離散の原因である。

マラキ3：1の預言　王の使者

1. メシアの先駆者には、初臨のときの先駆者と再臨のときの先駆者とがある。
   (1) 初臨のときの先駆者
      ① イザヤ40：3～5
      ② マラキ3：1
   (2) 再臨のときの先駆者「エリヤ」・・・マラキ4：5～6
2. 初臨のときの先駆者の登場・・・マタイ11：7、10、11
3. マラキは、旧約聖書の預言者の最後。彼のあとには、400年間、神からの啓示がない。
4. マラキという名は、ヘブル語では「わたしの使者」、「わたしの天使」という意味。マラキ3：1の「わたしの使者」は、まさにマラキである。
5. 預言者マラキの次に、預言者として声を発するのは、400年後のバプテスマのヨハネである。彼が、預言されていた「わたしの使者」である。
6. 3：1の内容は、メシアの初臨に関すること
   (1) メシアが突然、「彼の神殿」にやって来る。
   (2) この神殿は、第二神殿である。バビロン捕囚から帰還した民の指導者ゼルバベルによって建設された。
      ① 着工は、紀元前536年
      ② 一時中断、紀元前520年再開
      ③ 完成は、紀元前516年
   (3) ヘロデ大王によって拡張工事が行われた。
      ① ヘロデ大王の着工は紀元前20年。
      ② ヘロデ大王の死は、紀元前4年。拡張工事は続行。完成は紀元64年。
      ③ イエスの公生涯の時も、工事中。
      ④ 完成は紀元64年。66年にローマに対する反乱勃発。70年に神殿炎上。
   (4) イエスが公生涯で神殿を訪れた最初（紀元27年）と最後（紀元30年）には、イエスは神殿から両替人を追い出し「宮きよめ」をした。
      ① ヨハネ2：13～22
      ② マタイ21：12～13
   (5) マラキ3：1では、特に「彼の神殿」とある。この神殿はメシアのものである。よって、イエスの宮きよめは、当然の権限行使である。
7. 3：2～5は、メシアの再臨に関すること。再臨のときに、人々を清めることを預言している。

まとめ・・・マラキ3：1は、次のことを預言している。

☆メシアの初臨は、先駆者によって、前触れが告げられる。

大患難期後半期

番号	時期		出来事			聖書箇所	
	時期の区分	種別	項目		細目	黙示録以外	黙示録
55	大患難期の後半	裁きの進行	A	序曲			15:1～16:1
56			B	鉢の裁き(最後の七つの災害)	第一の鉢:地		16:2
57					第二の鉢:海		16:3
58					第三の鉢:川と水源		16:4～7
59					第四の鉢:太陽		16:8～9
60					第五の鉢:獣の座、暗黒		16:10～11
61		反キリストとイスラエル	A	反キリストの世界政府の首都バビロン		ｾﾞｶ5:5～11	
62			B	イスラエルと大患難期	イスラエル一般		
63					信仰あるレムナント		
64					逃れの町		
65					メシア再臨の前提条件		
66		ハルマゲドンの戦いとメシアの再臨	A	第一段階:反キリストの連合軍が集結する	第六の鉢:ユーフラテス川が枯れる	ﾖｴ3:9～11、詩2:1～6	16:12～16
67			B	第二段階:反キリストの首都バビロンへの攻撃		ｲｻﾞ13:1～14:23、ｴﾚ50・51	18:1～24
68			C	第三段階:エルサレムの陥落		ｾﾞｶ12:1～3、14:1～2、12:4～9、ﾐｶ4:11～5:1	
69			D	第四段階:反キリスト軍は、ボツラへ		ﾐｶ2:12、ｴﾚ49:13～14	
70			E	第五段階:イスラエルの民族的救い		ﾎｾ6:1～3、ｲｻﾞ53:1～9、ｾﾞｶ12:10～13:1、ｲｻﾞ64:1～12、ﾖｴ2:28～32、ｴﾚ50:4～5	
71			F	第六段階:メシアの再臨	再臨の場所	ｲｻﾞ34:1～7、63:1～6、ﾊﾊﾞ3:3、ﾐｶ2:12～13、士5:4～5	
72					再臨の状況	ﾏﾀ24:30、使1:9～11	
73			G	第七段階:ボツラからエルサレムまでの戦い		ﾖｴ3:12～13、Ⅱテサ2:8、ｲｻﾞ14:3～11、16～21、ｾﾞｶ14:12～15、ｴﾚ49:20～22	14:19～20
74			H	第八段階:オリーブ山上に勝利者として立つ	第七の鉢:大地震と大きな雹	ｾﾞｶ14:3～4、4～5、ﾏﾀ24:29、ﾖｴ3:14～17	16:17～21